

令和元年6月17日現在

機関番号：32614

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02574

研究課題名(和文)福祉言語学史・福祉言語教育学史構築のための近代日本語点字資料の整備

研究課題名(英文)Welfare linguistic history and maintenance of modern Japanese braille material for welfare language education science history building

研究代表者

諸星 美智直 (MOROHOSHI, Michinao)

國學院大學・文学部・教授

研究者番号：00220111

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、福祉言語教育史の資料のうち資料保存の必要性和緊急度が高い明治・大正期の点字資料である点字雑誌『むつぼしのひかり』の創刊号から順次高画素デジタルカメラによるカラー撮影によって画像データを作成した。これをもとに連携研究者とともに『むつぼしのひかり』所収の近代日本語資料としての音韻・語彙・語法にわたる価値、および近代点字かなづかい史上におけるかなづかいの特徴を検討した。これらの成果を公表するため、1903年創刊の第1号と第2号の写真版を収め、音韻・表記、語彙・語法の特色についての考察を収めた研究成果報告書を発行した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、近代の点字資料のうちでも貴重な点字雑誌『むつぼしのひかり』を高画素デジタルカメラによる撮影で画像データを作成したことによりデータを保存し、近代日本語の資料としての表記・音韻・語法・語彙にわたる価値を明らかにし、また、写真版によって近代福祉言語史の資料として稀覯書であった点字雑誌に研究者が接しやすい環境を整えたところに学術的・社会的意義が存する。

研究成果の概要(英文)：Image data was made by color photography by a high picture element digital camera in sequence from the first number of necessity of data preservation among the material of welfare language education history and the braille magazine by which degree of urgency is braille material in expensive Meiji and Taisho period "light of MUTSUBO SHI" by this research. This, and, "Hikari of" MUTSUBO SHI as well as a cooperation researcher are a phoneme as modern Japanese material of inclusion, vocabulary, the value over the word usage and a modern seal character, usage, it's whether it can be put in the history, usage, the feature was considered. To publish these outcomes, photography version of 1st number of first publication and 2nd number was put back in 1903 and a phoneme and the report of study results in which transcription and consideration about the characteristic of the vocabulary and the word usage were put were issued.

研究分野：日本語学

キーワード：点字 福祉言語学 むつぼしのひかり 近代日本語

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1)近年の福祉言語学への関心のたかまっており、2008年刊行の『日本語科学』23号に、相澤正夫「『福祉言語学』事始」という論文が掲載され、「『外来語』いいかえ提案」「生活者のための日本語」「やさしい日本語」といった日本社会において情報弱者と位置づけられがちな人々への情報保障に関する研究や提言が行なわれてきた。その後、2014年3月に行なわれた第33回社会言語科学会では、「言語的マイノリティーへの情報保障」というタイトルでシンポジウムが開かれている。さらに、明治書院刊行の雑誌『日本語学』の2014年9月号でも、「福祉の言語学」という特集が組まれた。このように、近年福祉言語学への関心は高まっているといえる。このような福祉言語学研究は年少者への国語教育や、日本語を第一言語としない人々への日本語教育、新卒者や留学生を対象としたビジネス日本語といった言語教育の現場からも注目されている。さらに、視覚障害や聴覚障害をもつ人々への言語教育には、特別の配慮が必要な場合があり、福祉言語学の対象となる。今後は、このような言語学の研究成果をふまえた福祉言語教育学の枠組みが必要となると考えられる。

(2)福祉言語学・福祉言語教育学の史的研究の必要性があった。福祉言語学はこれまで現代語・現代社会についての研究が中心であった。しかし、視覚障害者教育や聴覚障害者教育は、近代学校教育が始まった明治期に開始されているという歴史をもつ。これらの言語教育に特別の配慮が必要な人々に、実際にどのような言語教育が行なわれていたのかという福祉言語学史・福祉言語教育史の構築が必要になってくると思われる。そしてこのような福祉言語教育学史は、国語教育学史、日本語教育学史とならんで近代言語教育学史として位置づけることが可能である。

(3)福祉言語学史研究の基礎的資料としての近代日本語点字資料の整備の必要性があった。近代障害者言語教育史については、それぞれの分野で、教育史に関する研究は盛んにおこなわれている。また、聴覚障害者教育史については、言語学の観点からは手話研究・手話教育史研究の先行研究がある。視覚障害者教育史の言語学・日本語学にかんする研究は日本語点字のわかちがきやかなづかいに関する研究が一部ある。しかし実際の点字資料へのアクセスの困難さから、言語研究・言語教育の対象としては十分に研究されているとはいえない。そして言語研究に利用できる日本語点字文のコーパスも作成されていない。

以上の点から、福祉言語学史・福祉教育学史の構築のために、いままであまりデータが整備されなかったため言語分野からの研究が遅れがちであった近代日本語点字について、資料の撮影、テキストデータ化、コーパス化といった資料整備と調査をすることを本研究の目的とした。

2. 研究の目的

(1)点字資料の整備の意義 近代日本語点字資料を整備することには、以下の3点の意義が考えられる。日本語学文字・表記研究資料としての意義について、日本語点字は、1890(明治23)年に学校教育用文字として正式に採用され、それ以来点字日本語文は蓄積されている。表記上の特徴としては「現代仮名遣い」よりも早い段階で表音的なかなづかいを採用しており、その影響で現在も「現代仮名遣い」とはことなる独自のかなづかいをもっている。また、かな専用文・文節わかちがきをおこなう。このような、視読文字とはことなる表記の特徴をもつ点字資料群は、日本語学文字・表記論研究資料として有効である。福祉言語学・言語教育学史の資料としての意義について、日本語点字は、視覚障害者への学校教育用文字として開発されたという経緯をもち、さまざまな改良を加えながら今日も使い続けられている。その際の具体的な改良点などを精査するためには、実際の史的資料の復元が肝要となる。また、かな専用文である日本語点字文の史的研究は、視覚障害者のみならず、こどもや日本語学習の初学者、ディスレクシアなどの要因で漢字を習熟しない状態で日本社会で生活をする人々にとっての「わかりやすい日本語文」とはなにか、ということを考える上で重要となるだろう。言語研究以外の研究分野での利用の可能性について、データ化されて整備された点字資料を提供することにより、言語研究のみならず視覚障害者教育研究史や、視覚障害者のライフ・ヒストリー研究等さまざまな分野で利用が可能である。また、テキストデータ化することで、点字プリンターを通して点字複製版を印刷することが可能であり、点字使用者がみずから過去の点字文献を読み、その歴史を読むことが可能になる。

(2)日本語点字資料整備の緊急性 現在、日本語点字の史的資料は、歴史ある視覚特別支援学校で保管されている場合が多い。点字資料は紙面の凹凸を触読するため、摩滅の危険が視読文字よりもはるかに高く、扱いの難しいものである。原本の確認は最小限にとどめておくことがのぞましい。そのため、広く言語研究に用いるには原本の撮影と本文のデータ保定を行なう必要がある。そして少子化により学校の統廃合も進むことが予想されるなか、各学校に保存されている近代点字資料の整備・データ化は緊急度の高い課題であるといえる。そこで、本研究では、資料保存の必要性の緊急度が高く、独自の表記体系を持ち日本語学の研究対象としても価値のある近代日本語点字資料の保存と整備を行い、今後の福祉言語学・福祉言語教育史研究の基礎的資料を作成することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 筑波大学附属視覚特別支援学校資料室所蔵の明治期・大正期・昭和初期に刊行されたと推定される日本語点字資料のうち、言語教育史的に価値があると推定される国語教科書類を選定する。選定された資料を以下の手順で整備する。資料の写真撮影を行ない、目視により点字の凹凸がはっきりとわかるように画像加工を施し、PDF化する。点字使用者が資料を触読し、テキストデータ化を行なう。触読と視により校正を行なう。作成したテキストデータの形態素解析を行ない、コーパスを作成する。整備した画像データとテキストデータを紐付けて、CD-ROM等の記憶媒体に保存し、希望者に配布できるように成形する。

(2) 本研究では、筑波大学附属視覚特別支援学校資料室所蔵の近代点字資料のデータ化を行なうこととする。同校は明治期に開校され、日本語点字考案者である石川倉次が勤務していた東京盲啞学校を前身とし、多くの歴史的に価値のある点字資料原本を有する。また、所在地が東京都内であるため、同じく東京都内にある研究代表者の勤務校である国学院大学からの交通の便も比較的良好、調査しやすい環境にあるといえる。データの整備には撮影、データ化、コーパス化の3工程がある。また、作成したデータは希望者に提供できるようにする。そのさい書誌情報および言語資料としての特質などの基礎調査をおこなった報告書を添付する。データの完成には、3年間の計画を予定した。

4. 研究成果

(1) 本研究によって、近代福祉言語資料として貴重な価値を有する筑波大学附属視覚特別支援学校所蔵の点字雑誌『むつぼしのひかり』の1903年創刊第1号から予算の範囲内で可能な限り高画素デジタルカメラによって画像データを作成し、データの保存措置を講ずることができた。これをもとに、点字雑誌『むつぼしのひかり』の近代日本語資料としての検討を行い、言語資料としての価値を明らかにすることができた。

1903(明治36)年に創刊された点字雑誌『むつぼしのひかり』は教育・福祉・文化などさまざまな方面にわたる意義を有するが、言語研究の資料としてもまた、ことに近代日本語の表記・発音・文法・語彙などの各分野にわたって極めて高い価値を有する稀覯の資料であるといえる。

(2) 点字雑誌『むつぼしのひかり』の内容については、むつぼしプロジェクトによって第1号から墨字訳する作業が進められ、点字雑誌『むつぼしのひかり』データ化研究プロジェクト編集・中村満紀男監修(2016)『むつぼしのひかり 墨字訳 第一集(視覚障害者の歴史資料集1)』、同(2017)『むつぼしのひかり 墨字訳 第二集(視覚障害者の歴史資料集2)』として社会福祉法人 桜雲会点字出版部から発行が進められており、墨字訳によってその内容を知ることができる。しかしこの雑誌は一方で言語研究のためにも貴重な資料であり、その価値はことに明治期の日本語が点字という表音文字によってほぼ1字1音で、しかも主として表音式仮名遣いであることにより、音声の録音資料に準ずる点である。その特色をそのまま言語研究に利用するためには、研究者が直接点字のまま判読することが望ましいので、第1号と第2号の写真版を研究成果報告書に収めて印刷することができた。

(3) 『むつぼしのひかり』の音韻・表記について、近代に明治政府に採用されて法令・教育・出版などの公的な分野において文語のみならず口語にまで採用された歴史的仮名遣いに対して、外国人学習者に対する日本語教育の一部とともに早い時点で表音式仮名遣いをとり入れ、変遷と改訂が続けられた点字のかなづかいの『むつぼしのひかり』における状況が連携研究者の研究によって整理された。

(4) 『むつぼしのひかり』が点字による表音式仮名遣いであるところからほぼ発音通りの語形が確認できる。このため、点字でつづられた本文を検討することで、近代日本語の音韻に関する、漢字かな交じり文、歴史的仮名遣いによる資料以上に興味深い言語現象に接することができることを明らかにした。近世から近代にかけて、漢語の読みのうち漢音と呉音が交替し、漢語の連濁に変化が認められ、また、教育・学術・文化などの多方面にわたって西欧の学問の訳語あるいは造語として新たに登場した漢語の字音に呉音と漢音で相違がある場合にいずれを取り入れて定着、あるいは変化したのかについて、単に漢字かな交じり文で表記された論説・記事等では資料として扱いたがたいのに対して、点字資料は近代の漢語の読みの研究に極めて有益な用例を見いだすことができることを明らかにした。たとえば、「施行」は漢音・漢音で「せこう」、呉音・漢音で「せこう」で、今日なお両方の読みが並行しており、さらに仏教語などで呉音・呉音の「せぎょう」の読みもある語であるが、『むつぼしのひかり』1号には、「第11じょーしんあん おんがく 2ぶに かんする さいそくわ かくぶに おいて これを さだめ かいちよーの にんきよを えて せこー するものとす」(1号48頁)の例、「面目」は呉音・呉音で「めんもく」、呉音・漢音で「めんぼく」であるが、「第14じょー かいいんの ぎむを かき またわ ほんかいの めんもくを がいする おこない ある ものに たいしてわ やくいんかいの けつぎを もって そーとーの しょぶんを なすべし」(1号49頁)の例、また、もともと仏教用語での「檢校」は、「行」を呉音で「けんぎょう」、漢音で「けんこう」であり、現代では日常語ではないため「げんぎょう」の読みが忘れられ、「けんこう」と読まれる傾向にあるが、「そーきよく やまだりゆーの がんそ さきの そーろく やまだ けんぎょー とよの1せんせいわ ほーれき ひのと うしの 4がつを もつて う

まれ ぶんか ひのと うしの 4がつ 61さいにて そつせらる」(3号14頁)のように「けんぎょー」が用いられていることなどである。また、連濁して濁音で読むか清音のまま読むかも語によって史の変遷が認められるが、今日清音の「ろんせつ」が一般的な「論説」も、前掲の第1号・第2号の目次に「ろんぜつ」とあるように連濁している例が認められる。

(5)『むつぼしのひかり』の近代日本語における語彙・語法の資料としての価値は、近代の教育・学術・文化に関する内容が「論説」「講演」「学術」「文叢」「雑録」などの多彩な文語体・口語体・詩歌などの文体で作られ、ほぼ表音式の点字で印刷されている点であると指摘した。例えば、第1号所収の「発刊の辞」(第1号)、今井紅燈「救急法」(第1号)、うちだたけよし「我が国盲人諸君に望む」(第3号)、石川重幸「ぬけまいり」(第4号)のようなデアル体や、「卒業証書授与式における小西校長の告辞の大要」(第1号)、奥村三策の講演「鍼按学講義」(第1号以降各号にわたって連載)のようなデアリマス体の文章・記事が、「この ばあいには ほどこそ ちりょーほーを きゅーきゅーほーと いった たれも たれも ころそえて おかねばならぬ ほーほーで ある」(第1号18頁 今井紅燈「救急法」)、「第2 せいぶつをつくる げんそにわ たんそ さんそ すいそ ちっそが おーく ありますが むせいぶつにわ たんそや ちっそが あるものが すくない これが かがくてきの せいぶん に ふたつのものの ちごー ところで あります」(第1号11頁 奥山三策「鍼按学講義」)などの例があり、これらは二葉亭四迷『浮雲』に始まる言文一致体小説や三遊亭円朝口演・若林珮蔵速記『怪談牡丹灯笼』に始まる落語・講談の速記本・速記雑誌や、近代の速記の最高の技量を有する速記者を選抜して作成された明治22年に始まる帝国議会の貴族院・衆議院議事速記録が近代共通語の重要な資料ではあるが、ルビなしの漢字カタカナ混じりの歴史的仮名遣い表記に隠れてしまうため政府委員・貴族院議員・衆議院議員たちの方言も交えた音声が反映されない欠点があるのに対してほぼ表音式の点字による教育・学術・文化にわたる『むつぼしのひかり』の資料価値の高いことを指摘した。

<引用文献>

点字雑誌『むつぼしのひかり』データ化研究プロジェクト編集・中村満紀男監修(2016)

『むつぼしのひかり 墨字訳 第一集(視覚障害者の歴史資料集1)』

同(2017)『むつぼしのひかり 墨字訳 第二集(視覚障害者の歴史資料集2)』

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0件)

〔学会発表〕(計 0件)

〔図書〕(計 1件)

諸星美智直、伊藤孝行、中野真樹 『近代日本語資料としての点字雑誌『むつぼしのひかり』 福祉言語史の基礎資料としての近代日本語点字資料の調査と整備』よしみ工産株式会社 134

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

取得状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：伊藤孝行

ローマ字氏名：ITO Takayuki

研究協力者氏名：中野真樹

ローマ字氏名：NAKANO Maki

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。